

2006年10月29日現地（縦木川砂防ダムと朴木砂防ダム）見学会の報告

川辺川の濁水の元凶である縦木川砂防ダムと朴木砂防ダムの見学に出かけた。

つい1ヶ月ほど前までは川辺川は濁りが続いていた。濁水が原因で河床の砂利にシルトが付着してしまい、砂利を覆っていたコケをアユが摂取することができなくなり、アユの漁獲高が極端に落ち込んでいた。川漁師たちは川辺川濁水の原因が川辺川源流地区にある縦木川砂防ダムと朴木砂防ダムの上流域に堆積したシルトの流出にあることを突き止め、その改善を国に要請していた。

昨年と今年の豪雨で両砂防ダムの上流域の山腹が崩壊し、土砂が両ダムに堆積した。堆積した土砂の内、粒の細かいシルトが川の流れによって押し流され、下流域の川辺川を「清流川辺川」から「濁流川辺川」に変えてしまっていた。

この3月に現地検証したときは、川の流れの両側にはシルトの層がうずたかく堆積していて、それが川の流れに侵食されて下流に流出し、川筋は灰色の帯になっていた（右2枚の写真）。その状況がどうなっているのかが心配でこの見学会が企画された。

熊本県青年会館から縦木川砂防ダムまでの道は平野部を過ぎ二本杉あたりになると狭い道が続き、車がすれ違うのに一苦労。紅葉の季節は渋滞が続くというが、紅葉には少し早かったので対向車待ち合わせは数回ですんだ。山深く平家の落人で知られる五家荘に入ると、付近の電柱には「八代市〇〇」と地名が記されている。こんな山奥が「市」だというのは何か興ざめを感じる。

山の奥の奥の縦木川砂防ダムは、この3月に見たときとはまったく異なった様相をみせていた。堆^{うずたか}く積もっていたシルトの層が完全に消滅して、砂利とゴツゴツとした砂礫が河床を覆っていた。

朴木砂防ダムも同じであった。3月には堰堤の上流部に堆積していた灰色シルトが跡形もなくなり、濡筋が砂礫と岩を洗っていた。



縦木川砂防ダム堰堤の橋からみた同ダム直上流部（2006/3/2）
灰色のシルトの層を縫うように濡筋^{みおすじ}がある。山腹崩壊直後は土砂とシルトが赤い線の下まで堆積していたので、その殆どが流出したことが分かる。今回の見学ではシルトは全くなかった。



朴木砂防ダム堰堤上流から見た同ダム上流部（2006/3/2）
堆^{うずたか}く堆積した灰色のシルトを分けるように濡筋^{みおすじ}がある。今回の見学ではこの両岸に積もったシルトは跡形もなかった。



樅木川砂防ダム直上流からの眺め（2006/10/29）

シルト層は流出し、砂利と砂礫が残っていた。堤体の上部の流出口に倒木が刺さっている。水位が高いとき、シルトはこれらの穴から流出する。



朴木砂防ダム直上流からの眺め（2006/10/29）

シルト層は流出し、滞筋が砂礫と岩を洗っていた。

昨年の豪雨で川辺川減流域に大規模な山腹崩壊が誘発された。両砂防ダム上流部に堆積したシルト層はその後の川の流れて侵食されて下流への流出が継続した。河床に堆積したシルト層が完全になくなるまで流出し、その下流域は濁水が継続する。そしてアユの成育に致命的な影響を与えてしまっている。「このときの山腹崩壊は手入れの悪い人工林に多く発生していた」と中島さんたちは国土交通省の調査資料を調べ、現地調査を行った上で、証言している。実際、川辺川源流域では山腹崩壊の形跡があちこちに見られる。その現場が人工林であるか自然林であるかは、山（森林）を見慣れている中島さんたちにはすぐ分かるとのことであった。

29日の現地見学会で、「川辺川濁水の元凶である川辺川源流域の砂防ダムに堆積したシルトが流出しつくしてしばらくは濁水の心配がないこと」を皆で確認できた。そして、「再度の濁水を起こさないためには森林の整備」と、「砂防ダムが結局は濁水の原因になっていること」→「朴木砂防ダム・樅木川砂防ダムの撤去」を国に要求している現地の皆さんの正当性を私たちは実感した。